information

■ 四国西予ジオミュージアム昆虫展――昆虫標本と新聞記者西原博之の昆虫研究の歩み
日時：８月２０日（水）～９月８日（月）９：００～１７：００　（火曜日休館）
会場：四国西予ジオミュージアム 企画展示室２（西予市城川町下相945）
お問い合わせ：四国西予ジオミュージアム（℡ 0894-89-4028）

■ 核なき世界に向けて映画上映とトークイベント
日時：９月１３日（土）１３：１５～１７：００
「サイレント・フォールアウト」「放射線を浴びたＸ年後２」上映
伊東英朗監督と松浦秀人さん（日本被団協代表理事）の対談
会場：愛媛県美術館講堂（松山市堀之内）　　資料代：５００円
主催：伊方原発をとめる会（℡ 089-948-9990）

■ 安田節子さん講演会「農業衰退放置が招いた米不足と食料安全保障の危機」
日時：９月１３日（土）１３：３０～１５：３０
会場：松前総合文化センター２Ｆふれあい展示室　（松前町筒井633）
資料代：前売り／予約800円（当日1000円）
主催：愛媛有機農産生活協同組合（℡ 089-963-1002）

■ 安保法制（戦争法）強行採決１０年　抗議集会
日時：９月１８日（木）１８：００～１８：３０　（雨天決行）
場所：松山市城山公園・東口（県庁側口）付近
主催：安保法制の廃止を求める愛媛の会､憲法９条をまもる愛媛県民の会（℡089-913-0448）

■ 愛媛９条の会・９月例会
「二つの選挙後の改憲情勢について」井口秀作・愛媛大学法文学部教授
日時：９月２８日（日）１３：３０～１５：３０
会場：コムズ（松山市男女共同参画推進センター）５F大会議室
主催：憲法９条をまもる愛媛県民の会　（℡ 089-913-0448）

■ ９条パレード
日時：１０月１１日（土）１３：３０集合
場所：東雲公園西入口付近（松山市東雲町7-2）
コース：東雲公園→ロープウェイ街→大街道→千舟口　流れ解散
主催：憲法９条をまもる愛媛県民の会　（℡ 089-913-0448）

■ 原科幸彦（はらしな・さちひこ）さん（千葉商科大学前学長）講演会
「自然エネルギー100%大学――原発ゼロで未来を拓く」（仮題）
日時：１０月１３日（月祝、日）１３：３０～１５：３０
会場：コムズ５F大会議室
主催：伊方原発をとめる会（℡ 089-948-9990）

■ 国鉄四国トレインズ～40周年記念コンサート～「響け・届け・レールの先へ」
日時：１０月１８日（土）１３：００
会場：松前総合文化センター　入場料：1500円（武井事務所でチケットを預かっています。）
お問い合わせ：国鉄四国トレインズ事務局（℡ 090-6887-2398）

■ 第３９回伊方集会
日時：１１月２日（日）１０：００～
場所：　伊方原発ゲート前　　午後は八幡浜港フェリーターミナル４F展望ロビーで交流会
主催：　原発さよなら四国ネットワーク　（℡ 090-6147-1676）

武井事務所は月曜から金曜の10時～16時に開けています。お気軽にお立ち寄り下さい。

生き活き政治ネット通信

生き活き政治ネット
松山市衣山2-4-47､2F
TEL/FAX 089-924-2485
ikiiki@cnc.e-catv.ne.jp
２０２５年８月２５日発行

2025夏 参議院選挙
ながえ孝子さん 草の根の力で見事当選

2025年7月、酷暑の参議院選挙が終わりました。選挙区では、ながえ孝子さんが無所属として2期目の当選を果たしました。貴重な野党の一議席として、永江さんを国会へ送り出せることは心強いです。

さて、選挙の争点として、選択的夫婦別姓制度の導入への関心が低かったのはとても残念でした。一人ひとりが尊重される社会において譲れない政策です。このような女性たちの声を永江さんに届けようと、ひまわり集会を行いました。しかし、一方で、「高齢女性は子どもが産めない」「男女共同参画は間違い」などと発言し、デマや差別に基づく演説で国民を煽った参政党が大きく議席を伸ばしました。全国的に「女性の価値を産む産まないで決めるな」「差別に投票しない」などの抗議行動が広がりました。松山でも女性たちを中心に声を上げました。

今年は女性参政権80年の節目の年です。参議院の女性議員率はやっと29.4%になりました。世界的に見ると、まだまだ低い状態です。戦後80年、「核武装が安上がり」などと発言する女性議員も誕生する今、改めて私が心に刻む市川房枝さんの言葉「平和なくして平等なく、平等なくして平和なし」をご紹介し、真に平和で平等な社会を目指して、歩みたいと思います。

ひまわり集会（大街道）

気候アクションウィーク2025みんなでミライに種をまこう！ 協賛イベント

みんなで語ろう 私の気候危機

日時：9月23日（火　祝日）　13：30～15：30
会場：コムズ（松山市男女共同参画推進センター）3F　会議室2

この夏は３年続きの暑さの夏となりました。台風が日本の近海で発生するようになったり、獲れる魚が激変したり、東北地方では干ばつでコメが不作になるのが心配です。近年、熱中症で亡くなる方は右肩上がりで増えており、死亡者数半減を謳った気候変動適応法改正も行われました。こういった気候危機の現れと思える問題について、暑い中で屋外のイベントは避けて、しゃべり場スタイルで参加者一同の記憶を新たにしたいと思います。話のネタをなにか一つ考えて、ぜひお持ち寄りください。

参議院選挙を終えて

今年の参議院選挙の結果は、この社会にこれからどんな変化をもたらすのか。私達はあらたな政治の分岐点にいるのかもしれない。全体の投票率は前回を上回ったにも関わらず、自民党だけではなく既成の政党支持が前回を下回ったことは政治不信のあらわれだろう。

一方で国民民主党や参政党の発する即時的な言葉に若い世代が反応する様は、失われた３０年をただ手をこまねいてきた政治状況そのものの帰結だ。保守的で排他的な振れは、いわゆる失われた３０年の中で働く人々の生活が決して良くならなかったことやなんとか今の状況を抜け出したいという切実な思いがあるからだろう。

労働組合やコミュニティを持たない孤立した労働者、働く者が分断され浮遊する。行き場のない人々の声を受け止めるにはどうすべきか。社民党がその受け皿になれればよかったがなどと無責任な高齢者の繰り言がでる。社民党と言えば、高齢者の友人は我々がフェードアウトするのに歩調を合わせるかのようだと言った。

変化の激しいこの時代に身を置いた時、自分で考えること、自立することが重要だと改めて心する。

岩倉 浩元

青木理さんの言葉をお借りします。「（前略）今般の参院選は、この国の政治の劣化―というより凄まじいまでの退廃が、あからさまに露呈した選挙として記憶されはしないか。奇矯な言動で耳目を引く新興政党の尻馬に乗ったのか、与党を含む主要政党までが排外主義を堂々唱え、差別と憎悪を公然と煽る醜態を演じたからである。（後略）」（サンデー毎日2025/8/3号「青木理のカウンター・ジャーナリズム　抵抗の拠点から」）。

全く、その通りだったと思います。それでも学ぶべきことはありました。よくも悪くも「一票」が選挙結果を動かす、とわかったこと。そうとわかって、もしもこれまで「一票でなにが変わるの？」と冷めていた人たちが動いたなら、次の選挙では修正の力が働くのでは、と期待したいのですが・・・楽天的過ぎるでしょうか？

そうして、もうひとつ、わかったこと。女性議員が増えるには、まず、女性候補者を擁立しなければ話にならない！ということ。

大早 直美

今回の参院選、選挙区については勝つべくして勝った選挙（もちろん支援者全員が油断することなく活動することが大前提）だったと思っています。自分としても電話掛け、スタンディング、選対会議への参加等、充分かどうかはともかく自分に出来る範囲のことはやったという感じです。

今回の選挙で私にとっての大インパクトは参政党の躍進です。私の政治活動での目標は政権交代であり、今回の選挙は、昨年の衆院選に続いて与党を少数与党に追い込むことでした。同じ思いの方も沢山おられたと思いますが、自民・公明の惨敗は目標通りの結果でした。

しかし片方では参政党の躍進です。こんな極右の政党が躍進するというのは何なんでしょう。これまでにも右翼や歴史認識のおかしな人物はいました。しかし今回の参政党という集団現象は何なんでしょうか。

党首が平気で嘘をつく、人種差別はする、それを多くの人が熱狂的に応援する。ちょっとこれまでの常識では考えられませんが、歴史的にはナチスヒットラーの台頭もありました。

また新たな課題が出てきたようですが、みんなで考えながら進めて行きましょう。

前田 勇次

7月14日の神谷宗幣・参政党代表の街頭演説をyoutubeで聞いた。ヒットラー、安倍元首相、トランプ米大統領を彷彿させるもので、歴史観は日本会議、統一教会そのものだった。これまで市民運動で取り組んできたことを全否定された。なぜ反対なのか、根拠が述べられる訳ではない、深く考えているとは思えない。「日本人ファースト」だけでなく、参政党の主張に異を唱える人たちを敵と見なす。陰謀論を持ち出し、敵をあぶり出すために「スパイ防止法」!?　こんなとんでも話に観衆の大歓声、拍手である。

ナチス・ドイツに抵抗した牧師・マルティン・ニーメラーの言葉が思い出され、戦慄が走った。「ナチスが共産主義者を連れさったとき、私は何もしなかった。私は共産主義者ではなかったから。次に彼らが社会主義者を連れて行ったとき、私は何もしなかった。私は社会主義者ではなかったから。次に彼らが労働組合員を連れて行ったとき、私は何もしなかった。私は労働組合員ではなかったから。次に彼らがユダヤ人を連れて行ったとき、私は何もしなかった。私はユダヤ人ではなかったから。そして彼らが私を連れて行ったとき、私を助ける人は誰も残っていなかった」。

こんな人たちとどう対峙していけばいいのか、暗澹たる気持ちになるが、子どもたちの未来のために。工夫を凝らして活動を続けていくしかない。

奥田 恭子

NHKドラマ「シミュレーション ～昭和16年夏の敗戦～」(8/16、17,石井裕也監督)を観た。1941年4月、国の機関「総力戦研究所」に、官、民、軍の若きエリートたちが集められる。彼らは日米開戦後の動向を分析、予測するが、導き出された「日本必敗」の結論が活かされることはなかった。史実に基づくドラマだ。

好戦的な軍部が強引に開戦に持ち込んだという単純なものではなく、予算を使ったから後に引けない、戦死した者たちを「無駄死に」としたくないなどの意地や責任逃れが、軍や政府、皇室、そして「世間」…全てを包み込み、進みたくない方向に雪崩れていった。

選挙や民主主義的な決定の仕組みの整わない当時の人たちが、戦争を煽る空気に流されていったのは、仕方ないかもしれない。

が今、全ての人の手に投票用紙があり、自由にものが言える！　なのに、オカミ任せや、ムードに乗せられる風潮は変わらないと感じた参院選だった。でもリテラシー度高い人たちの中で選挙運動に参加できたこと、選挙区で結果を得られたことは幸せです^^

西井 紀代子

「反省しない」日本は、黒川に学べるだろうか？

ドキュメンタリー映画「黒川の女たち」を見た。「終戦間際のソ連軍侵攻。関東軍は既に撤退。黒川開拓団は生きて帰るため、ソ連軍に助けを求めた。見返りは、18歳以上の女性たちによる接待。女性が性の相手として差し出された。帰国後、労いはなく、差別と偏見、誹謗中傷が女性たちを待っていた。身も心も傷を負った女性たちの声はかき消され、事実は伏せられた。だが、黒川の女性たちは手を携えた。したこと、されたこと、みてきたこと。加害の事実と、犠牲の史実を封印させないために―」（映画公開サイトより抜粋）

2013年、犠牲者の二人が語りはじめ、2018年黒川開拓団遺族会会長が多くの人の声を聞き、説得し、この事実を碑に書き残した。「こういった歴史があったことを、生きている者が伝えないといけない。碑文ができて、後悔することはない」とある人は語る。ある孫は「おばあちゃんが自殺しないで生きてきたことを感謝している、おばあちゃんは私の誇り」と手紙に綴った。

誰もが二度とこんな過ちを繰り返さないことを望んでいる。「女性の議員が、戦争反対と言ってくれる人がもっと増えて欲しい」と語った人もいた。昂然と生きていく強さ。仲間や家族、そして社会へと伝播していく大切さ。過去を無かった事にせず向き合う勇気。この映画から私は多くを学んだ。

「黒川の女たち」監督：松原文枝／2025年製作／99分

渡邊 佳子